



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	マニ教資料翻訳集成(1) : リュコポリスのアレクサンドロス 『マニカイオスの教説に対して』
Author(s)	戸田, 聡; Toda, Satoshi
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 146, 209(左)-239(左)
Issue Date	2015-07-24
DOI	https://doi.org/10.14943/bgsl.146.l209
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59562
Type	departmental bulletin paper
File Information	146_02_toda.pdf



リュコポリスのアレクサンドロス 『マニカイオスの教説に対して』

戸 田 聡

翻訳序

- A. BRINKMANN (ed.), *Alexandri Lycopolitani Contra Manichaei opinioniones disputatio* (Bibliotheca scriptorum Graecorum et Romanorum Teubneriana), Stuttgart: Teubner, 1989 (reprint ; 以下 BRINKMANN と称する) を底本とした。
- 訳出に当たっては英訳 (P.W. VAN DER HORST & J. MANSFELD (transl.), *An Alexandrian Platonist against Dualism. Alexander of Lycopolis' Treatise 'Critique of the Doctrines of Manichaeus'*, Leiden: Brill, 1974), 仏訳 (A. VILLEY, *Alexandre de Lycopolis. Contre la doctrine de Mani* (Sources Gnostiques et Manichéennes, 2), Paris: Cerf, 1985, pp. 56-90) を適宜参照した。
- 訳文中の章区分 (アラビア数字で示した) は MIGNE 所載のギリシア語文及び BRINKMANN で用いられているものである。
- 先訳 (VAN DER HORST & J. MANSFELD の英訳, 及び VILLEY の仏訳) において既に詳細な解説的訳註が施されていることなどに鑑み, 原則として本稿では詳細な訳註を付さずに, もっぱら原文の日本語訳の作成に注力することとした。

リュコポリスのアレクサンドロス 『マニカイオスの教説に対して』

1 キリスト教徒たちの哲学は単純だと称される。この哲学は気質の鍛錬に対して最大の注意を払い、神についてのより正確な言説については謎めいた語り方をする。誰しも、これらのことについての彼らキリスト教徒たちの熱意の主要点に——すなわち彼らが、作用因を最も尊いもの、最も重要なもの、存在するあらゆるものの原因であるとみなす時に——、理に適って賛同するだろう。また、なぜなら、彼らキリスト教徒は、例えば何が道徳的卓越性^{アレテー}であり理性的卓越性^{アレテー}であるかといった問いや、そして気質や情動について語られる限りのこと、といった比較的難解なことどもを道徳論に委ねて、奨励的な話題にかかずらっているからである——すなわち一方で、個々の卓越性^{アレテー}の獲得に関して諸元素を〔引き合いに出して〕説明することなく、他方で、比較的浩瀚なありきたりの諸々の掟を積み上げているからである。大勢の民衆はそれら掟を聞くと、経験から知られるように、善性へと大いに専心するのであり、そして敬神の刻印が彼らの気質の上に押される。この刻印は、このような習慣から把握されるところの気質を燃え立たせ、彼らを徐々に善への意欲へと導いていくのである——。

他方、この哲学がのちの世代の人々によって甚だしく分裂した時、多くの人が論争学派の場合のように（一部の人々が他の人々よりも一層巧みでかつ探究的になったのは論争学派のせいだ、と言う人もあろう）探求の営みを打ち立て、中には早くも分派の指導者になった人々もいる。気質に応じた不可視的な（？）鍛錬は、彼らのゆえに衰弱していった。すなわち一方で、分派を指導していけると思っている限りの人々は、言葉による正確さを達成しておらず、他方で、大勢の群衆は同じ事柄に対して一層党派的な態度を示しており、いかなる規準も、また、探究の解決を得る手がかりたるべきいかなる法も、入手不可能な状況なのである。そして他の人々の間で功名心が過度になりすぎて、何であれ害をもたらさずにいないのと同様に、2 この人々

の場合にも、各々が教説の新奇さによって自分より前の者を凌駕しようと熱心になり、彼らは〔キリスト教徒たちの〕この単純な哲学を無益な物の中へと投げ入れた。マニカイオスと呼ばれる者のようにである。この男は、生まれはペルシア人で、少なくとも私見によれば、驚くべきことを言うという点で万人を凌駕している。そして、この男の新機軸が流布したのは昔でなく——最初にパ波斯という名の者が我々に対してかの男の教説の唱道者となり、この男のあとトマス、及び彼らのあとに別に何人かが唱道者となった——、彼自身は、ウァレリアヌスの治世に生まれて、ペルシア人シャープールの行軍に同行し、何かのことでこの男〔シャープール〕と衝突して死んだ、と言われている。

この男〔マニカイオス〕の教説の次のような話が、かの者を知る者たちから我々のもとに到来した。すなわち彼は、神と物質を原理として措定し、神は善、物質は悪だと言う。神は善の多さによって、物質が悪によって卓越している以上に卓越している、と¹。彼が物質〔質料〕と言うのは、プラトンが言う物質〔質料〕——すなわち、質と形姿を受け取ると何にでもなるところの物質（それゆえプラトンはこれを「万物受容的」「母」「乳母」と呼んでいる）——でも、アリストテレスが言う物質〔質料〕、すなわち形相と欠如とを有するところの元素、でもなく、これらと異なる別のものである。というのも彼〔マニカイオス〕は、存在する各々の物の中における無秩序な動きを物質と呼んでいるからである。そして一方の、すべて善い諸々の力は、従者として神のもとに配置され、他方の、すべて悪しき諸々の力は、同様に物質のもとに配置される、と。明るさ、光、上なるもの、これらすべては神と共にあり、冥暗、闇、下なるものは物質と共にある、と。神にも希求があるが、これらはみな善いものであり、同様に物質にも希求があるが、それらはみな悪しきものである、と。3 そこで或る時、物質が欲望へと至り、上なる場所に到達し、そして到達してから、神のもとに在った限りの光や明るさに驚嘆して、

¹ 以下、「～と」と訳している部分は、原文では基本的に不定詞句（すなわち間接語法）になっている部分である。

神を拒絶してこの支配権を掌握したいと思った、と。そして神は、物質に復讐したいと思ったが、復讐を行なうべき手段たる悪を欠いていた、と。というのも、神の住まいの中には悪は存在しないからである、と。そこで神は、我々が魂と呼ぶ或る力を、物質に対して、それがそれと全面的に混交するべく、派遣した、と。というのも、これらのあといつかこの力〔魂〕が分離することは、物質の死となるだろうから、と。そこで、こうして神の先見^{プロノイア}〔或いは「摂理」〕に従って魂は物質と混交し、似ていない物が似ていない物と混交した、と。そしてその混交において魂は物質と共感した、と。つまり、内に在るものが卑しい容器の中でしばしば変化するように、魂もまた物質の中で、本性に反する状況にあつてこのようなことを蒙り、悪の分^{メトウーシア}有へと劣化したのだ、と。そこで神はこれを憐れみ、我々がデーミウルゴスと呼ぶ別の力を送った、と。この力が到達して宇宙創造^{コスモボイイア}に着手した時、〔魂と呼ばれる〕かの力のうち、混交からいかなる有害なものも蒙っていなかった限りのものが物質から分離され、まず太陽及び月となり、そして中程度の悪の中にあつたものは星となり天全体となった、と。そこで、物質（太陽と月はここから分離されたのである）の一部は宇宙の外へ追放され、闇の中で燃えるが光がなく夜によく似たような、かの火なのである、と。他の諸元素の中で、また、それら諸元素中の植物や動物の中では、神的な力が混交して不均一な仕方で運ばれている、と。まさにそのゆえに宇宙が生じ、またその中で太陽と月——太陽と月は、諸々の生成と諸々の消滅とによって、神的な光をつねに物質から分離し、神へと送り出しているのである——が生じたのだ、と。4 つまり、デーミウルゴスに加えて、別の力が太陽の輝きへと下つてきてこれらのことを成し遂げるのである、と。そして、この事柄は明白であり、盲人にも明らかである——と言う人もあろう——、と。というのも、月は〔満月へと向かう〕増大の時には、物質から分離された力を受け取り、この期間のあいだその力に満ち行くからであり、そして満ちると、〔新月へと向かう〕減少の時に〔その力を〕太陽へと送り上げるからである、と。そして太陽は〔その力を〕神へと放ち、これをしてから、再び別の満月から自らへと魂の遷移を受け取り、そして受け取ると同様に、それが神へとひとりで運ばれていくの

を許し、つねにこのことを行なうのだ、と。そして、太陽の中にはこのような像——人間の形がその像のようなものである——が見られ、そして物質が妬みに駆られて、力全体それ自体による混交に従って、人間を——魂のいくばくかを自ら有する者として——自ら造るのだ、と。それにもかかわらず、死すべき他の諸々の動物と異なりこの[人間の]形は、一層大いなるものへと非常な程度で結び合わされ、人間は神的な力に与るのだ、なぜなら、人間は神的な力の似姿であるから、と。キリストは^{ヌース}理知である、と。そしてキリストは、かつて上なるところからやって来た時、この[神的な]力の非常に大きなものを神へと解き放った、そして最後に十字架につけられた時、キリストはこのような仕方^{はりつけ}で知識を示し、[かくて]神的な力は物質へと合わせられ、^{はりつけ}磔にされたのだ、と。そこで、物質が減びることは神の決定であるので、[人は]魂のあるすべてのものを控え、野菜やすべて感覚のないものを食べるのだ、と。また、結婚や性的快楽や子づくりを抑えるのであり、それは、種族の継承に従って、[神的な]力がさらに物質の中に住むことのないようにするためだ、と。そして、物質の混交が[神的な]力に対して加えた虐待の手段からの浄化を目論んで、自殺することがあってはならない、と。

5 これらが、彼らが言っていることの主な事柄である。彼らは何よりも太陽と月を、神々としてではなく神へと至ることが可能な道として、敬っている。そして、神的な力が厳密に分離された時に、外なる火が起こり、火自身と、物質の中の残っている他のものすべて[すなわち万物]とを共に燃やすだろう、と。

この者たちの中で比較的優美な人々であって、ギリシアの言説に無知でない人々は、我々に自分たちのものの中から想起させる。すなわち一方で、密儀に基づいて、ティタンによって切断されたディオニュソスを言説に適用しており——彼ら自身が、神的な力が物質の中へと分けられたと言っている、そのごとくに——、他方で、巨人族の戦いの詩に基づいて、神に対して反抗する物質の蜂起のことを彼ら自身も知らないわけではなかったのだ、と言っている。哲学の営みにおいて我々と同学の士だった人々のうちの少なくとも幾人かを、言論のこのような欺瞞が自分の側へと向き直らせたことに鑑みて、

私としては、[以上見てきた]これらのことが、言説をしかるべき吟味なしに受け入れる人々を誘導するのに充分でないとは言わないので、仔細な検討のために、今やそれが各々私自身にとってどういう按配か、という点について、私は何をしたのか途方に暮れる。というのも、彼らの前提は、それらに従って我々が探究を行なうべく、慣習的に受け入れられてきた言説によるものでないからであり、また、いくつかの原理は、それらの帰結を我々が観照するべく、論拠によるものでないからである。単に語られたことについての哲学の営みは本当に僥倖であり、[この営みを行なう]彼らは、自分たちのところにある古い書と新しい書を前提として——彼らはこれらの書を神の靈感を受けたものと前提する——、ここから自分たち自身の教えを導き出すのであり、そして、これらの書に従わない事柄が彼らによって語られたり行なわれたりするということが起こる場合にのみ、彼らは自分たちが論駁されたと思うのである。ギリシア人流に哲学を営む者たちのもとの論拠の諸原理であるところのもの、すなわち直観的な命題[つまり前提]、これ[に当たるもの]が、彼らのもとでは預言者たちの言葉なのである。ここでは、これらすべてのもの[諸原理や諸前提]が放擲され、私が先に言及した諸々のことが何ら論拠なしに語られているので、そして他方[論駁するには]、言論を以て答えを為すことが必要であり、しかしながら、よりもっともらしい他の事柄や、人々をより一層誘導できるような事柄を対置しないことが必要なので、[論駁するための]方法はより困難でありさらに一層難しいものである。なぜなら、複雑な説明を行なうこともまたしなければならぬからである。つまり或いは、それら説明は比較的厳密なものとなり、[マニ教徒たる]これらの者たちによって確証なしに既に説伏された人々の注意を惹かないだろう。或いは、それら説明は誘導のためのものとなり、同じ機会へと落ち込むだろう。というのも、それら説明は同じようなものに基づいて行なわれたと思われるだろうからである。それゆえ、非常なかつ多大な配慮と、言説を導くであろう神とが、真に必要である。

6 彼 [マニカイオス] は神と物質という2つの原理を前提している。もし [一方で] 彼が、生成するものを存在するものから分離しようとするので

あれば、その出発点〔或いは仮定〕は同様にまずいものではない。〔そのような出発点或いは仮定が設けられる〕その目的は、物質が自らを作ってしまうて、能動的かつ受動的なものとして、〔2つの〕反対物についての理論を受け取る、などということがないことであり、また、相反するこういうもの——このようなものは、語ることすらたぶんよろしくない——が作用因に関して観察される、などということがないことである——神は〔自らの〕業^{わざ}の完成のために物質を必要とせず、すべてのものは、かの理知との関連で、実質において生成することが可能なのだが。もし他方で——むしろこれが彼〔マニカイオス〕によって語られていることのようにだが——、存在する諸々の物の無秩序な動きが物質であるなら、まず彼は、自ら気づかずに別の作用因（もちろん悪を成すものである）を仮定しており、そしてその帰結をすら、すなわち、もし神と物質が仮定されねばならないのなら、〔2つの〕作用因の各々に、基底を成す物質が存在するようになるべく、別の物質が神に服することになる、ということすら、理解していない。したがって、彼は我々に対して2つの代わりに4つの原理を作っている、ということが示されるだろう。二分法によるこの分割もまた驚くべきものである。つまり、もし神が、彼にとって善であるところのものであるなら、そしてもし彼が、神に反するものを仮定したいのなら、なぜ彼はピュタゴラス派の或る人々のように悪を神に対置しないのか。善と悪という2つの原理が存在し、両者は絶えず不和であり、そして善が勝利する（というのも、悪が優越するようなことがあると、すべてが滅びるだろうから、と）、ということが、少なくとも一層受容しやすい仕方では彼らによって語られている。というのは、全く以てそれ自身に即するなら、物質〔質料〕は物体でもなければ、厳密に言って、非物体的なものでもなければ、単に何らかの或る物でもなく、無限定なものなのであって、さらに形をとることによって限定されたものとなる（例えばピラミッド〔の形〕をとることによってピュール^{ピュール}となり、8面体〔の形〕をとることによって空気となり、正6面体〔の形〕をとることによって地となる）からである。そこで、いかにして物質は諸元素の無秩序な動きなのか。物質は、自らに即するなら、実質のあるものではない、というのも、動きは動かされるものの中にあるからで

ある。物質〔質料〕は、このようなものであるようには見えず、むしろ、未だ形へと還元されていない第1の基底であって、かつ、そこから他の諸々のものが由来するところのもの、であるように見える。したがって物質は、無秩序な動きであるのだから、つねに動かされるものとともにあったのだろうか、それとも、動かされるものからいつしか分離されたのだろうか。というのも、もしそれがかつて自らに即して在ったのなら、それはこのような仕方では存在しなかっただろうからである。というのも、いかなる動きも動かされるものなしではありえないからである。他方もし、物質がつねに動かされるものの中にあつたのなら、再びかくて少なくとも2つの原理、すなわち動かすものと動かされるものが、仮定されることになる。そこで、これらのうちのどちらに、我々がそれを第一に神と並べて仮定するために、票が入れられるのだろうか。

7 さらに、言葉から見て〔「無秩序な動き」という表現において〕「無秩序さ」は付加物であり、これは全く排除される。というのも、動きがない時には、無秩序さが語られるのが妥当だろうから。そして、物質は諸々の動きの中のどの動きなのか。直線的な動きなのか周回的な動きなのか、それとも変容に従う動きなのか、それとも生成や腐敗に従う動きなのか。しかし、周回的な動きは規則的な〔秩序ある〕動きであり、その結果、それは万物の秩序に割り当てられている。この人々〔すなわちマニ教徒たち〕によれば、この動き（太陽も月もこの動きの中にある）を原因だと称することは不〔可能であり〕²、彼らは太陽や月を唯一、神々に属するものとして敬うと言っている。では直線的な動きを〔原因だと称するの〕か。しかしこの動きには、自分の場所への到達という果てがある。つまり、地的なものは地面に達すると動くのをやめ、また、あらゆる動物・植物は自らの境界に届くと成長するのをやめるのであり、その結果、彼ら〔マニ教徒たち〕によって物質に結びつけられている無窮の終末よりも、これらのもののこの停止のほうが物質にとって死である、と言うのが理にかなっているだろう。また、生成や腐敗に

² ἔστι impers. + inf. 「～することが可能である」のἔστι が省略されている、と理解した。

従う動きがこの前提にふさわしい動きである、と考察することも不 [可能である]²。というのも物質は、彼らにとって、生まれざるものだからである。そこでもし、彼らの変容に従う動きを物質に割り当てるのであれば——というのも、彼らは特にこういうことを言っているようだからであり、なぜなら彼らは、気質の様々な変化や魂における様々な悪さは物質による、と言っているからである——、彼らがこれらをも一体どのように言っているかを注視することが適切である。というのも [この場合、物質は] 自らを変容させつつ、つねに最初から始めて、進んで行って中間に達し、そしてかくて終極へと達するだろうからである。しかし、終極に達してもそれは停止せず——実際もし、物質の本質が変容であるなら——、同じものを經由して最初へと引き返し、そして同様にしてここから終極へと達し、こういうことをしながら決して休息しないだろう。例えば、中点がBである AG が変容するなら、変化はAからBへと達し、そこから Γ へと達するだろう。したがって再び、 Γ の頂点からBへと引き返して、Aへと達するだろう、そしてこのことがつねにあるだろう。黒からの変化が、中間が灰色、頂点が白、そしてここから再び戻って灰色へと、そして同様に黒へと [達する] のと同様に、変容の最初が白からあり、同じアプローチになる。実際もし、8 変容に従って、物質が悪を成す原因であるなら、かくて物質は善を成すよりむしろ悪を成す [原因である] とは立証されない。つまり、変容の最初が悪からであるとせよ、しかれば、かくて変容はここ [悪] から、どちらでも良いものを經由して、善へと達する。しかし善からは、したがって再び、どちらでも良いものを經由して、最初 [たる悪] がある。動きがこちらの頂点へと達するのであれ、別の頂点へと達するのであれ、理屈は同じである。そしてこれらは余剰に基づいて語られている [すなわち、余計な語りである]³。というのも、一方で、いかなる動きも量にかかわるものであり、他方で、悪さと徳とを支配するのは質だからである。これらが種の点で区別されていることを我々は知っている。

神と物質だけが原理なのか、それとも、これらの間に在る何か別なものが

³ VAN DER HORST & MANSFELD 訳及び VILLEY 訳の解釈に従った補い。

欠けているのか。というのも、もし何もないのなら、これらは交わらずに [各々] 自分たちに対して取り残されるからである — つまり、[2つの] 頂点が交わるためには、お互いがお互いを必要とするために中間に何かが必要である、というのは正しい言い方である —。他方、もし他のものが在るのなら、再び、それは物体であるか非物体的であるということが必要となり、その結果、付随的な第3の原理が生じてしまう。

神と物質は全く非物体的なものなのか、それとも一方が物体で他方が非物体的なものなのか、それともどちらも物体なのか。つまり、もしどちらも非物体的なものであるのなら、どちらのものも他方のものの中にはない — 文法が魂の中にあるというような仕方を除けば（しかし、神と物質についてこういうことを考えるのは馬鹿げている）。そして、空虚はすべてを取り巻いていると或る人々が言うように、もし空虚の中にあるというような仕方であるのなら、他のものは再び実質のないものである[ことになる]、というのも、空虚の本質は無だからである。他方もし、諸々の属性のようであるのなら、まず第一にこれはありえない。というのも、それらがいかなる本質も欠いていて存在する、ということはあるからであり、というのも本質とは、諸々の属性の下に敷かれてある、というような乗り物だからである。そしてもし、どちらもが物体であるのなら、両方とも重いか軽いか中くらいか、或いは一方が重く他方が軽いか中くらいか、ということが必要である。そこでもし、両方とも重いのであれば、かくてどちらも中身が詰まっている⁴ ことが必要であり、同じことは軽いものについても中くらいのものについても[妥当する]。またもし、それらが [お互いに対して] 異なるのであれば、一方のものは他のものと全く分離されていよう。つまり、重いもののためには場所があり、中くらいのものや軽いもののためにはそれと異なる場所があるのであり、つまり、一方のもののためには上があり、そして他方のもののためには下や真ん中があるのである。あらゆる球状のものにとっての下とは真ん中である、

⁴ VAN DER HORST & MANSFELD 訳及び VILLEY 訳の解釈に従い、*συμπληρῆ* (BRINKMANN の推測) という読みを採る。

というのも、それ [真ん中である下] からあらゆる中空のほうへ、[そして] 上の表面に至るまで、どこでも距離は等しいからである。そして再び、すべての重いものはどこからであれ同じところへと運ばれる。それゆえ、物質は無秩序に動いて——というのも、物質には本性的にこういうことがある [のだそうだ] からである——神の領域 (光、輝き、そのようなあらゆるもの) へと到達した、という話を聞いて、私には失笑が起こったのである。他方もし、一方が物体であり他方が非物体的なものであるなら、まず第一に、物体であるところのものだけが動きうる。次に、もしそれらが混ざらないものであるなら、どちらも自らの本性に従って離れており、他方もし、一方のものが他方のものと混ざるのであれば、それは魂であるか理知であるか属性であるかだろう。というのも、このようであってのみ、非物体的なものが物体と混ざることとは可能だからである。

9 さて、物質はどのようにして、或いはどのような原因に基づいて、神の領域へと運ばれたのか。というのも、本性に従ってであれば、物質には、彼ら [マニ教徒たち] が言うように、下及び闇があるからであり、上及び光は本性に反しているからである。その結果、動きは、物質にとって本性に反して起こったのであり、また、誰かが石または土くれを上へと投げた場合のようなことが物質に起こったのである。それゆえ、投げた者の力によって [上へと] 上げられたこのようなものは、わずかの間中空にあったのち、同じ場所へと運び下ろされた。そこで、誰が物質を上なるところへと上げたのか。というのも物質は、自ら自身を理由としては、また自らに基づいては、本性に反して自らにあるこのような動きを作動させはしないだろうからである。そして、石や土くれのように物質が上なるところへと高められるためには、物質は [外からの] 力を待ち設けねばならない。しかし彼ら [マニ教徒たち] は物質と共に他の何もものもを残してはおらず、他方、神を残してはいる。そこで、理屈から帰結することは明らかであり、すなわち彼らによれば、神は、力づくに無理やり、物質をご自身と同様に中空のものたらしめたのである。

さらに、もし物質が悪であるなら、物質の欲求もまたたぶん全くそのようなもの [すなわち、悪いもの] であるだろう。そして、悪に対する欲求は卑

しく、善に対する欲求は非常に立派なものである。物質が明るさや光を欲望したのであれば、その欲望は卑しいものでない。それは、人が悪の中にありながらしかるのちに徳を欲望する場合、というのが卑しくないのと同様である。つまり、その反対は非難されるのであり、それは、立派な人が卑しいものに対する欲望へと至ることである。それは、神が、本来的に物質に属する諸々の悪を欲求する、と彼らが言う場合と同様だろう。つまり神の善は、このようなもの——富や多くの地や多くの金がそういったものである——、すなわち所有者にとって、人々から他の者へのそれらの移動が少なくなる、というようなもの⁵、だと理解されるべきではないのである。むしろ、もし人が一般にこれらのものの像を考えねばならないのなら、私が思うに、人は知恵や学知と比較するのが正しいだろう。そこで、知恵や学知が、もし他の人がそれらを共有しても、減ることがなく、それらを有する人々も減ることがないのと同様に、もし物質が、彼ら〔マニ教徒たち〕によれば、善を欲求したとしても、善に対する欲求という点で神が物質をねたむのは理にかなっていない。

10 ウラノスの陰部を切る者たちであれ、クロノスに対する息子による企み（自分が支配権を掌握することを目的として）を考案する者たちであれ、クロノスをして息子たちを呑み込ましめ、次いで石の形によって誤らしめる者たちであれ、それら物語作者たちを、彼ら〔マニ教徒たち〕は遙かに凌いでいる。というのも、彼らが神に対する物質の公然たる戦争を描写する時、かつ彼らが、ホメロスがイーリアスの中で、ゼウスが神々のお互いに対する戦争を喜ぶというふうにしたように、これらのことを裏の意味によって語ることをしない時——ホメロスは〔神々の争いを描くことによって〕、勝つものも負けるものもお互いと合わさって、諸々の異なるものから秩序界が構成されることを暗示しているのだが——、彼ら〔マニ教徒たち〕が語っているのは、

⁵ 原文 (*ὧν ἐλάττων γίνεται τῷ κεκτημένῳ ἢ ἀπὸ τῶν ἀνθρώπων εἰς ἕτερον μετὰστασις*) を修正する BRINKMANN の推測 (*ὧν ἐλάττωσις γίνεται τῷ κεκτημένῳ ἢ εἰς ἕτερον μετὰστασις*) に基づいて、VAN DER HORST & MANSFELD 訳は「少なくなる」を「減少を意味する」と解している。

どうしてこのようなことでないだろうか。私がこういうことを言うのは、このような人々が、[議論において]証明を欠いている時にはいつも、可能な限りどこからでも詩の中から [材料を] 集めてこれらを自分たちの教説のために弁明とする、ということを私は知っているからである。もし彼らが、自分たちが読むいかなるものについても多少注意を払って読んでいれば、彼らはこういう目には遭わなかっただろうが。

そして実に、一方であらゆる悪が、特に妬みと恨みが、神の一団から放逐された。他方で、神は、物質が善を欲望したがために物質に対する企みを考察した、とこれらの人々 [すなわちマニ教徒たち] が語る時、彼らはそれら悪を神のもとに取り残している。では神は、自分が持っているもののうちの何によって、物質を罰しようとしたのか。というのも、神は単一であると語るほうが、これらの人々 [すなわちマニ教徒たち] による [神に関する] 話よりも正確だと私は思うからであり、また、神の観念を語ることは、他の諸々のものについて語るほどには容易でないからである。実際、単に言葉によってその観念を示すことは可能でなく、多大の系統的教育と労苦によって [ようやく] 可能なのである。しかし、少なくとも次のことを我々はみな知っている。すなわち、怒りと、物質に対する処罰の欲求は、そのように思う人のまわりで実体化する情動なのである。そしてこれらの情動は、立派な人のまわりでは生じないだろうし、ましてや善自体のまわりでは生じないだろう。

11 さて、議論は転じてまたもや別の事柄に至る。つまり彼らは、神は物質に対抗して力を遣わした、と言っているので、この力が善について神より劣るか、同様であるか、ということを見てとるのが適切である。つまり、もし劣っているのであれば、原因は何か [、つまり、原因を挙げることは不可能なのではないか]。というのも、一方で物質は、神のもとにあるものを何ら共有していないからであり、他方で彼 [マニカイオス] は、唯一の善すなわち神と、唯一の悪すなわち物質とを [議論の中に] 導入しているからである。他方、もし [神から遣わされた力が善について神と] 同様であるのなら、何ゆえ一方の者 [すなわち神] が王のごとくに命じ、他方の者 [すなわち神から遣わされた力] がこのような自発的な労苦を担ったのか。そして物質につ

いては、それら諸力は悪に対して同様なのか、それとも劣っているのか、ということが探究されるだろう。つまり、もし劣っているなら、それらは悪よりも全く劣っているのである。すると、それら諸力は善の共有によってこうなるのだろう、というのも、二つの悪が存在する場合、このように劣っている悪は、たぶん全く善の共有に従って、こうなっているだろうからである。そしてそれらは物質のまわりにはいかなる善も取り残さない。したがって再び、別の難問がある。つまりもし、支配的である物質を別の力が悪によって凌いだなら、この力のほうが一層支配的なのであり、というのも、より大いなる悪こそが、支配権のもとにある物質に対する支配権を掌握するからである。

12 「神は物質に対抗して力を遣わした」という言葉はいかなる証明もなしに語られており、いかなる点においても説得的でない。そして、同様にこのこと自体もそれ自身の論拠を得ることが必要である。つまり、このことの原因は次のようだと言っているのである、「いかなるものも悪でなく、すべてのものが善であるために、くだんの力は、取っ組み合いにおいて敵手を負かす闘技者たちのように、物質と交わらねばならなかった。その目的は、当の力が、悪を制圧することによって、それが存在するのを終焉させることだった」と。私は、存在する諸々のものの中から物質を、思念もろとも消し去ることのほうが、遙かに敬虔であり神の優位性にふさわしいと思う。しかし思うに、彼らは、悪であるもの——物質がこれだと彼らは言っている——が今でも存在するゆえに、このことを受け入れなかった。そしてそれでもなお、諸々の物は、より悪いものへと変化しない物が存在するということが人か認めるようになるべく、このようなものであることを已めることができない。他方で、我々が将来に対する一層ましな希望を持つべく、これらのものが何らかの仕方ではどほどに減少する、ということに対する感覚 [或いは知識] がなければならなかった。というのも、「万物は焼き尽くされるだろう」「燃えるものを有するあらゆるものは、燃やす時にはすべてを燃やすだろう、そして太陽は火であり、それは自らが持っているものを燃やさないだろうか」と言っているキティオンのゼノン——ということに基づいて、彼が思うに、

万物は焼き尽くされるだろうということが推論されたのである——に対して、正当にも次のようなことが言われている。すなわち、[道理をわきまえた]或る優美な人が次のように言ったと語られている。「しかし私は、何ものかが太陽の火によって影響を受けたことを、昨日も1年前も何年も前にも見たことがなく、同様に今も目にしていない。万物がいつか焼き尽くされるだろうということを我々も信じるためには、このことが時と共に少しずつでも起こらねばならなかったはずだ」と。そしてまさにマニカイオスの言説——これはいかなる信憑性も伴わずに語られているのだが——に対して、同じ答えがあると私は思う。すなわち、「これらはいかなる点でも減少しておらず、兄弟が兄弟を殺す時という、かつて最初の人間が生まれた時 [カインによる兄弟アベル殺しを指すか?] にも在ったのであり、今でもなお在り、そして戦争は同じであり、欲望は一層多様になっている。そこで、もしそれらが已まなかったとしても、我々が『時が経つにつれていつかこれらは已むだろう』と確信するためには、少なくともこれらが減少せねばならなかったはずだ。そこで、それらが同じであるのなら、そこに、将来のものに対するいかなる信憑性があるだろうか」と。

13 そして諸々の悪とは何だと彼 [マニカイオス] は言っているのか。というのも、一方で、太陽や月については何も欠けてはいないからである。他方で、天や星々については、そのようなものがあると彼が言っているかどうか、そして [言っているのであれば] それは一体何か、順次探究するのが理にかなっている。さて、一方で彼ら [マニ教徒たち] によれば、悪とは無秩序であり無秩序な動きである。他方で、これらのもの [つまり天や星々] はつねに同じ仕方で在り、同様の状況にあり、惑星の1つが、定められた時間よりも長く或る宮にとどまることを求めたという理由で非難されることもなければ、恒星の1つが、同じ星座にとどまらずに百年に1度分だけ東のほうへ動いている [歳差運動のことを指す] という理由で非難されることもない。そして地において、もしいくつかの地方の粗暴さが非難されるなら、或いは、もし舵手たちが海の嵐を非難するのなら、まず第一に彼ら [マニ教徒たち] によれば、このようなことどもは善の分に属する。[つまり、] 少なくとも、

もし地の上に何も生長しなければ、あらゆる動物〔或いは生物〕は速やかに滅びるだろう、そしてこのことは、物質に絡めとられた力の多くを神へと送り出すことができるのである〔、したがってこのことは、マニ教徒たちによれば、善なのである〕。そして、接近してくるこれほど多くの魂を一度に収容できるためには、多数の月が存在することが必要となるだろう。同じことが海についても言える。つまり、滅びる者たちが最も速やかに神への道に就くためには、滅びることは僥倖なのである。そして彼ら〔マニ教徒たち〕によれば、地の上での戦争や飢饉や、破壊をもたらすいかなることも、最も大きな名誉の中にある事柄である。というのも、善のいかなる原因も名誉あるものであり、そして善の原因であるこれらの事柄は、たまさか起こった死に基づいて、滅びるものたちから分離される力を神へと送り出すからである。14 どうか我々は知らなかったようだが、エジプト人たちがわにやライオンや狼を敬うのは正しいのである。なぜなら、とりわけこれら動物は他の動物よりも頑強であって、それら食されるものを食い尽くし、あらゆる仕方滅ぼすからである。また、〔エジプト人たちが〕鷲や鷹を〔敬うのは正しいのである〕、なぜならこれらもまた、空中や地上のより弱い動物たちの破壊者だからである。そしてたぶん、彼ら〔マニ教徒たち〕によれば、このゆえに人間は最も大いなる名誉の中にあるのである、なぜなら、あらゆるものの中でとりわけ人間は、策略と技術とによって最も多くの動物を服従させるのがつねだからである。そして人間は、自分自身この善への持ち分を失うことがないよう、他者に食べられる食物となるのである。そこでまた、彼ら〔マニ教徒たち〕によれば、小さなどんな種からでも実に大きなものを成し遂げさせるものである誕生は、馬鹿げたことであり、彼らによれば、神的な力が地上での滞在から解放されることが短くなる〔すなわち、より早まる〕ためには、これら誕生したものが神によって破壊されることのほうが遙かに良い。しかし、或る人は言うだろうが、不行状や不正義を指向することやおよそこのたぐいのことをマニカイオスは何と言うだろうか。これらに対しては確かに教育や法が助けとして与えられているのだろうか。教育は、こういうことが人間たちについて起こらないように考慮するところのものであり、法は、何らかの

不正義な行ないの中にある者として見つかった者を処罰するところのものである。そして次に⁶、万一農夫が地を手なずけることをおろそかにする場合、神の支配が減少するという、地に対する告発は何なのか——神の支配は、或るものが果実を産し、他のものがそうならない、といった時に、また或いは、他の原因に従って風が吹いて、或る者たちが得することになり、他の者たちが意にそぐわないことを耐え忍ぶことになる、といった時に、正しいことに従ったものである——彼ら[マニ教徒たち]は、偶然的なものの本性と必然的なものの本性とを知らずにいるべきではなかつたらう、というのも、そうであれば[すなわち知っていれば]、彼らはこのような不思議譚を語りはしなかつたらうから。

15 そこで、快楽と欲望はどこから来るのか。というのも、これらがとりわけ悪だと彼らは言っているからであり、彼らが物質を憎んでいる理由として、これ以上のものは他にないからである。これらが動物の感覚にのみかわるものであること、また、欲望と快楽とを把握[或いは享受]するのは感覚を有するもの以外の何物でもないということ、これらは明白である。というのも、植物に快楽や痛みのいかなる感覚があろうか、また、地や水や空気*ダイモーン*にいかなる感覚があろうか。そして神霊たちは——彼らは感覚を有する生き物なので——たぶんこのゆえに、犠牲に関して習慣として行なわれているものを楽しむのであり、それら習慣として行なわれているものが行なわれないと、不快になるのである——神についてこのようなことを考えることは不可能なのであって——。そして、「なぜ生き物は楽しみ、かつ欲望するのか」と言う者たちは、その前にまず、なぜこれらのものは感覚を有するのか、そしてなぜこれらのものは食物を必要とするのか、という告発を受けるべきである。というのも、もし、それらが不死の生き物であって腐敗や成長を免れていたならば——例えば太陽や月や星々——、それらが感覚を有するとしても、それらはこれらのこと[享楽や欲望]の外にあり、このような告発の外にある[ことになる]からである。そして人間は、知覚することも判断すること

⁶ 13の「まず第一に」を受けた「次に第二に」、という意味。

もでき、そして潜勢的に賢く——というのも、人間は賢い者となる力を持っているから——、自分自身のものを受け取っておきながら、それを踏みつけにしている。16 つまり、これらの男たちに次のように尋ねることは全く適切である。すなわち、いかなる人間も立派になることはできないのか、それとも、或る人は、そうなることが可能なのか、と。というのも、もし賢者がいないのなら、なぜマニカイオス自身は——私は他の人々は放っておくことにするので——、自分が立派だと言うだけでなく、他の人々をこのように立派な者にするのに十分な力を持っているとも言うのか。他方、もし全く立派な人が存在するのなら、すべての人もまた立派になるということを何が阻んでいるのか。というのも、一人の人について可能なことは、万人についても可能だからであり、また一人の人が有徳者となった、そのための手段を用いれば、万人もまた有徳者になるだろうからである——もし彼らが、その力の大部分はそのような人々に対しては阻まれている、と言うのでなければ。したがって再び、まず第一に、教育に関する労苦の必要とはいかなるものか。というのも、[教育が必要でなければ]我々は眠っているうちに立派な者になるのだろうか。或いはなぜ、このような男たちは、特に自分たちに聴き従う者[すなわち聴従者]たちを、善に対する希望へと導くのか。というのも、[教育が必要でなければ]彼らは遊女たちと共に時を過ごすうちに自分自身の善を確保するようになるだろうから。そこで、もし教育と、より良き転回と、徳の獲得に関する熱心さが、彼 [=マニカイオス?] をこのような者にしたのであれば、万人がこのような者になるべきであり、そして彼ら [マニ教徒たち] によって繰り返し語られた物質の無秩序な動きは崩壊してしまっているのである。人間たちが、感覚を有する者であるがゆえに、欲望と快楽に基づいて有するところのものを、[神から来る]知恵が少しずつ善へと転回させていって、それら [欲望と快楽] に由来する馬鹿げた帰結を滅ぼしてしまうように、[マニ教徒たちは]知恵が神によって人間たちに武器として与えられた、と言うほうが遙かに良かっただろう。というのも、このようであれば彼ら自身、徳を教えていると称することになり、志と生き方の点で羨まれる者だったろう。そして、万人が賢者になることによって、悪がいつか已むだろうと

いうことに対する希望は多大なものだったろう。このことをイエスは理解していたように私には見える。そして[イエスは]、農夫や棟梁や家造りや、技術を有する他の人々が善から追放されないよう、万人の共通の集会を据えたのであり、また同時に、単純かつ容易な言葉を通じて、彼らを神の観念へと連れ戻し、善に対する欲望へと至らしめたのである[、と私には見える]。

17 さて、「神は物質に対抗して神的な力を遣わした」という言葉は一体どのような仕方で行われているのか。というのも、もしその力がつねに存在していたなら、そしてその力に先だっては神も物質も考えられないのであれば、かくてまたもや、マニカイオスによれば原理は三つであることになり、そしてたぶん、少しあとにはそれら原理は多数であることが明らかになるだろう。他方、もしその力が二次的[直訳すると「後生的」]であるなら、どうしてそれが物質に与らないものであるのだろうか。他方、もしそれが神の部分であるなら、まず第一に、かくて彼らは神を複合的・身体的なものにしているのであり、これは馬鹿げておりありえない。他方、もし神がその力をつくったのであって、そしてそれが物質に与らないのであれば、私は驚くのだが、この者[マニカイオス]であれ彼の一派であれ、(もし神が自ら欲してこの力をつくったのであれば——神が存続して次に出てくる諸々のものは実質である、と言われていたことは、真実なる教えに即したことである——)神は、先在する物質に何も頼まずに、生成するその他あらゆるものの原因者ともなったのだ、ということはどうして吟味しなかったのだろうか。この男に由来する明らかに馬鹿げたことどもとはこれらのことであり、そして次に続くのがその帰結である。つまり、その力は物質へと流れるという本性を有したのだろうか。それともこのことは、その力にとって本性に反したことだったのだろうか。そこで、力はどうして[物質と]混ざったのだろうか。他方、もしこのことがその力にとって本性に即したことだったのであれば、全く以て、その力は常時でも物質と共にあったのだろう。もしそういうことであれば、最初から神的な力との混ざりものである物質を、どうして彼らは悪く言うのだろうか。さらに、神的な力が物質と混ざっており、そしていつか[物質の中から]撤退したとして、どうして物質は滅びるのだろうか。というのも、そ

の力は善なるものを保存しているのであり、そしてその力は、自らを含んでいるところの諸々のものに対して滅びを或いは他の何らかの悪をもたらすよりもむしろ、それらのものにとって、他の何らかの善の原因となるというほうが、理にかなっているからである。18 さて、彼らによって語られた賢明なこととは次のことである。すなわち、魂が身体から分かたれると身体自体は滅びるということを我々が目にするように、かの力が物質を放棄すると、残されたもの——物質がまさにそれだが——は解体して過ぎ去るのである。つまり、まず第一に、彼らが見ていないのは、存在する諸々のものうち、滅びて非存在となるものは一つもない、ということである。というのも、非存在は存在しないからである。解体が起こるのは、諸々の身体〔物体〕が四散して何らかの変化を有する時であり、その結果或るものは地へと向かい、他のものは空気〔中〕へと向かい、また他のものは別のものへと向かうのである。次に〔第二に〕、彼らは、物質は無秩序な動きであると自分たちが想定しているのを想起していない。しかし、自らのゆえに動くものであって、しかも動きがその本質であって決して偶然的にそれに在るわけでない、そういうものが、力が離れ去っていくと、その力が〔そもそも〕自らの中へと下ってくるより前に自らが存在したそのあり方を已める、という言い方は、どうして理にかなっているだろうか。一方で、魂に与らないいかなる身体も動かない、他方で、物質の本質自体は動きである——無秩序であるとはいえ——と彼らは言っているのだから、彼らは違いをわかっていないのである——というのも、植物にも植物的魂があるのだから。調子外れを奏でるリュラの上に調和が来ると、あらゆるものを調和のとれたものにするという、それと同様に、神的な力は、無秩序な動き——彼ら〔マニ教徒たち〕によれば物質がこれである——と混ざって、〔物質に〕内在する無秩序の代わりに何らかの秩序を物質の上にもたらしたのであり、そしてつねに、神の合唱隊〔である被造世界?〕にふさわしい秩序をもたらし続けているのだ、という言い方のほうが良かっただろう。なぜなら、マニ自身がどうして一体、これらのことについて把握する能力を持っていたのだろうか、そして一体何によって、これらのことを物語ったのだろうか。というのも、彼ら〔マニ教徒たち〕は、彼

自身もまた物質と、その中に閉じ込められた力との混ざり物だ、と認めているのだから。そこで、もし無秩序な動きによって——これが、彼が持っていたところのものである——彼がこれらのことを語ったのなら、その教えはどうして拙劣でないだろうか。またもし、彼が神的な力によって語ったのなら、その教えははや疑わしい。つまり、一方で、神的な力に由来するものであることによって、その教えは真理を分有しており、他方で、無秩序な動きに由来して別の部分を分有していることによって、その教えは嘘へと変じていくのである。19 そこでもし、神的な力が物質を秩序づけたのであり今でも秩序づけている、ということが語られていたならば、[語られたそのようなことは] 遙かに賢明だったろうし、マニカイオスの言説の信頼性のために、より多くの寄与がもたらされていただろう。

さて、「神は別の力を下へと遣わした」。まず、先の力について語られたことは、この[別の]力についても共通であり、彼らのこの第一の力に関する言説から帰結する限りの諸々の馬鹿げたこと、これらは今の場合にも言うことができる。誰が他のことを容認するだろうか。というのも、そもそも神はなぜ、あらゆることについて力のある一つの力を遣わさなかつただろうか。それとも、一方で、人間の理知はすべてのことに対して、同じ理知が或る場合には幾何学的であったり、他の時には天文学的であったり棟梁的であったりそのようなものであったりと、様々であり、これに対して他方で、神のためには、神が第一の力と第二の力[の両方]を必要とするなどということのないよう、すべてのことに対して能力のある、そういう力を見いだすことが困難だった、ということなのだろうか。またなぜ、一方の力は造物主的であり、他方の力[すなわち第一の力]は、自分のために都合良く物質と混ざることができるというほどにむしろ受動的なのか。というのも、もし悪が神の住まいの中になかったのであれば、善の秩序と、善に対する[悪の?]優位性との原因が、ここでまたもや私にはわからないからである。というのも、もし神がひたすら善であり物質がひたすら悪であるのなら、他の諸々のものは中間的であり中間に在ると言うことが必要だからである。しかし、彼らが一方の力を造物主的な原因だと言い、他方の力を物質と混ざったものだと言

う時には、中間的な諸々のものについて、異なる製作者が見いだされることになる。そこでたぶんこれは、最近の者たちが、どちらでも良い諸々のものに関する言説の中で言っているところのこと、すなわち、先行するもの〔或いは「優先されるもの」〕と先行しないもの〔或いは「優先されないもの」〕なのだろう。

造物主的な力が宇宙創造に着手した時、混淆の中であって自らの卓越性の上にとどまったものが物質から弁別され、太陽及び月となり、他方、中程度の悪に与ったものが天及び星々となり、さらに他の諸々のものは、[それらもやはり] 神的な力と物質との混ざり物であるので、これらのものの内に捕えられた、と彼らは言っている。20 そこで私はこれらすべてに対して驚くのだが、どうして彼らは、自分たちが神的な力を身体的なものにして、それを言わば諸部分であるかのように切断している、ということに気づかないのだろうか。というのも、もし神的な力が受動的であってその全体を通じて分割可能であるなら、そしてその一部が太陽となり他の一部が月となるのなら、なぜ神的な力もまた物質でないだろうか。というのも、これら〔太陽や月〕は純粋に神的な力に属する、と彼らは言っているのだから。物質の特性であると我々が言っていたところのこととは、まさにこのこと、すなわち、物質はそれ自体では何でもなく、^{すがたかたち}姿 形と質とを受け取ることによってあらゆる画定されたものになるのだ、ということである。そこで、もし神的な力の一つの基底から太陽と月だけが生じたのであって、これら〔太陽と月〕が別々のものであるなら、なぜ別のものも生じてはならないだろうか。そして、あらゆるものが生じることになるのであれば、帰結するものは明白であり、すなわち神的な力は、様々な姿形へとなるものとして、それ自体も物質なのである。他方もし、神的な力に基づいて生じるものが太陽と月以外に何もないのであれば、存在するすべてのものの中に含まれるのは太陽及び月であり、星々の各々は太陽及び月或いは別のものであり、乾いた地に生きる生き物や鳥たちや両生類の生き物の各々もまた各々に従って〔太陽及び月或いは別のもの〕である。これらのことは、奇跡を見せびらかす者たちですら受け入れないだろう、ということとは、万人にとって明白だと私は思う。

21 これらのあとのことを眺める者たちにとって、道はまっすぐでなく、[今しがた]通りすぎた道よりも困難である。というのも、彼らは、太陽と月は物質との混淆の際に何ら不都合な影響を受けなかった、と言っているからである。そこで、他の諸々のものがどうして自らの本性に反して劣悪化したか、彼らは語るができない。つまり、もし神的な力がそれ自体、一部は良く、他の一部は一層良い、というふうであったなら——胸までが人間であって、その他が馬である（つまり、一方の動物[であるところのもの]は良く、しかし、人間[であるところのもの]のほうがもっと良い）というヒッポケントウロスの物語のように——⁷、その時には同様に、神的な力についても、その一部は善の点で秀でており、他の一部は善に即して劣っていると考えることが可能であり、そして物質については、一部は悪の優位性を持つものとして在り、他の諸部分は別々なのである。〈他の諸部分はそのようであって、〉⁸別の言い方があるのだろう。というのも、太陽と月は最初から一層理性的であって、自らの卓越性の上にとどまるべく、物質のより少ない悪の部分を混淆のために選び取った、と推測することが可能だからであり、このような劣悪さが弱体化した時に善における非常な優位性を発揮したということがありうるからである。他方、その他の部分は、非摂理的にはないが等しい摂理と共にでは決してなく、むしろ物質内の悪を各々その量に従って享受するべく、[物質の中へと]落ち込んだのである。そして、この力について彼らから語られていることは何ら違いがなく、むしろその力自体全体を通じて同様なことが観察されているので、次の言い方、すなわち、混淆において或るものは汚れない状態であり続け、他のものは何らかの悪を分有した、という言い方は非説得的である。

22 そして彼らは、太陽と月は、月が新月において満月に至るまで自らの中へとこの[神的な]力を受け取り、次いでそれを太陽に与え、そして太陽

⁷ BRINKMANN, p. 29 l. 6 に見られる *καί* の挿入は無視した。

⁸ 〈 〉内は、BRINKMANN, p. 29 l. 13 への異読一覧 (apparatus criticus) 内に見られる推測 (*τὰ ἕτερα δὲ ὡσαύτως*) の訳出。

がこれを神へと送り出す、という仕方で、神的能力を少しずつ物質から分離して神へと送り出している、と言っている。しかしもし、彼ら〔マニ教徒たち〕が少しずつ天文学者たちの門戸に足繁くかよったなら、このような目には遭わなかっただろう、そして、月は——或る人々によれば、自らの光に与ってなどおらず——太陽によって輝かされているのであり、〔三日月、満月などといった〕その諸相は太陽との間隔に即してあるのであって、満月になるのは月が太陽から 180 度離れている時であり、朔となるのは月が太陽と同じ度へと運ばれる時である、ということを彼らは知らずにはいなかっただろう。そして次に、魂は一体数多くあって様々なものから——つまり実際、宇宙自体の魂も動物たちの魂も諸々の植物の魂もニンフたちの魂も神霊たちの魂もあるだろう、そしてこれらのものの中には鳥たちの魂も乾いた地に生きる生き物たちの魂も両生類の生き物たちの魂もあるだろう——外見によって区別されず⁹、月の中でいつも絶えず同様な一つの姿が我々に見えるというのは、どうして驚くべきことでないだろうか。また、月が半月である（半円に見える）時や、凸月である〔つまり、完全な円まで行かないが、どちら側にも膨らんで見える〕時にも、この身体のこのような連続とは何か。またもや、〔それら魂は〕どのようにして、或いはいかなる姿¹⁰をとって、月へと上げられるのか。つまり、〔個々の魂が〕もし火のように軽ければ、それは単に月までで〔止まるので〕なくむしろ絶えず〔より一層〕上方に在る、というのがありそうな話だろう。他方、もし重ければ、月には全然到達できないだろう。そして、最初に月に到達したものが直ちに太陽へと送り出されずに満月と他の魂の到着とを待つということには、どういう理屈があるだろうか。さらに、満月以降月が減少していく時に、〔地上において物質から〕分離された力はこの期間、すなわち、荒廃した都市のように月の中から第一の魂〔の群れ〕が空

⁹ BRINKMANN, p. 30 l. 17 への異読一覧 (apparatus criticus) 内に見られる提案に従って *o v* を挿入。

¹⁰ VAN DER HORST & MANSFELD 訳及び VILLEY 訳の解釈に従い、BRINKMANN が本文 (p. 30 l. 22 - p. 31 l. 1) に載せた推測 *όχηματι* を退け、写本の読み *σχήματι* に従う。

になって、月がまたもや第二の移住を受け入れるようになるまでの間、どこにとどまっているのか。つまり、魂が集められて月への移住のために準備万端となるための場所として、地の、或いは雲の、或いは他の所の、いずれかの部分に何らかの貯蔵庫もまた区画されることがなされねばならなかっただろう。しかし、またもや別の困難がある。そこで、なぜ、月は直ちに満ちないのか、或いはなぜ、月はまたもや15日間待つのか。次のこともまた、これまで語られたことに劣らず驚くべきことである。すなわち、人々が記憶して以来、月が15日以内で満ちたことが一度もなく、デウカリオンの時の洪水の時にも、さらに、言わば地上のすべてのものが滅びて多くの力が物質から分離されるということが起こったフォロネウスの時にも、そのようなことが起こっていないのである。これらを別にすると、出産や不出産や死滅の動きも同様に注視するのが適切であり、それらが規則的に起きない場合には、月の満ち欠けの秩序も同様に保たれないのでなければならなかっただろう。23ついでにでなく、次のことへのアプローチもなされねばならない。すなわちもし、物質に含まれた神的な力が無限であるなら、太陽や月が成し遂げるところのことどもは、当の力が減少していくことについて全く何もできないのである。というのも、有限のものが取り去られてから以降、残るものはまたもや無限なのだから。他方もし、当の力が有限であるなら、これほどの時間の中では、この力の一体どれほどが宇宙から減少したかについて、[何らかの]感覚がなければならなかっただろう。しかし [現実には] 万物は同様のままである。

物質の形——太陽の中に現れたところの——に従って人間は造られた作品なのだと彼ら[マニ教徒たち]が言う時、これらもまた、その説得力のなさによって、いかなる物語を凌いでいないだろうか。というのも実際、像とは原型の形なのだから。そして、もし彼らが太陽の中に形を取り残すのであれば、彼らによって形がかたどられた際の基準たる範型はどこにあるのか。というのも、その人間自身を彼らは本当に人間であるとは言っておらず、神的な力だとも言っておらず(というのも、彼らはこの力を物質と混ぜており、他方彼らは、彼らによればのちにおける物質との分離以降に生じたとされる

この形が、太陽の中に現れた、と言っているのだから)、さらに造物主的原因だとも言っていないからである——というのも、造物主的原因は神的な力の救済のために遣わされ下されたのだと彼らは言っており、そして彼らによれば、この原因は太陽より前に全く整えられねばならないからである。なぜなら、それが到来するや否や、太陽と月が物質から分離されるということが起こったからであり、そして彼らは、当の形は太陽の中に現れた、と言っているからである——。「物質が人間を造った」と彼らは言っている。一体どのような仕方で、いかにしてなのか。というのも、これを想像するのは不可能だからである。というのも、人間が形の形であることに加えて、彼らによれば、かくて人間はいかなる実質をも持たず、さらに、観念へと至ることもできないからである。どうして人間は物質の作品であるだろうか。というのも、彼らによれば、考えるとか感覚するといったことは物質に属する営みではないからである。では、彼らによれば人間とは何者なのか。魂と身体の混ざりものなのか、それとも別のものなのか、それとも魂全体の上にある理知なのか。しかし、もし理知であるのなら、どうして、より良いものがより悪いものの作品であるだろうか。また、もし魂であるのなら——魂とは神的な力だと彼らは言っている——、どうして彼らは神的な力を神からとりあげて、それを物質の造物活動のもとへと再配置するのか。他方もし、彼らが身体だけを取り残すのであれば、彼らはまたもや、これ [すなわち身体] はそれ自体では動かないものであり、他方で物質の本質は動きだと彼らが言っている、ということ想起させられるべきである。しかし実に、何もかもそれ自体では物質へと導かれなないと彼らが思っている時に、このようなものから成り立っているものを物質の作品であると推測することは、理にかなっていない。そしてさらに、或るものによって生じたものは当のものより全く劣る、ということは異論の余地のないことであるように思われるのであり、つまりかくて宇宙はその造物主よりも劣り、製作者の作品である限りのものは製作者よりも劣るのである。そこでもし、人間が物質の作品であるなら、人間は全く以て物質より劣るものである。そしてかの男たち [すなわちマニ教徒たち] は、物質より良いものを何も取り残していない。そして、神的な力が物質と、或い

は物質より劣るものと、混ざるといふことは等しいことでない。彼らを取り扱って言っていることどもを、考えることは可能でない。というのもなぜ、人間の実質のために、物質はより優れた形を必要とする、と彼らは思うのか。或いはなぜ、人間が出現したことに対して、形は鏡の形のように自足独立でないのか——それとも、生成するあらゆるものの生成と滅亡とに対して太陽自体が自足独立であるのと同様に[自足独立なのか]。——「[物質は]自分たち自身の造物活動の時にかの形を模倣した」。一体、物質が持っていたもののうちに何によってか。物質と混ざった神的な力によってか。そうであれば、神的な力は少なくとも物質に対して道具としての関係に在るのである[、そしてそう考えることは合理的でない]。そうでなく、無秩序な動きによってか——彼ら[マニ教徒たち]はこのように物質を特徴づけている——。しかし、すべて同様なものは秩序と正確さとの中で模倣によって終極目標へと至るのである。つまり、家であれ船であれ、人為的なその他のものであれ、技術が人間の模倣によって作り出した人像であれ、無秩序を通じて完成させられることはありえないのである。

24 彼らはキリスト[より正確な発音は「クリスト」]を知らず、文字をイオタから¹¹ エータへと変えることによって彼をクレストと呼んでおり、本来の意味で[クリストについて]推測されていることに代えて別の意味を導入して、[キリストは]^{ヌー}理知だと彼らは言っている。そこでもし彼らが彼[キリスト]のことを所知であり能知であり知恵であると言うのなら、かくて彼らは、教会に所属して彼について語っている人々に合致することを身に引き受けている、ということが露見するだろう。そこで、彼らはどうしていわゆる古い歴史全体を放擲するのか。他方もし、或る人々に従って彼らが[キリストを]後生のものであり、外から入り行くものや帰結するものの一つだと言うのなら、我々は吟味してみよう。というのも、この教説を提出する人々はとりわけ説得的に、7歳ごろ、感覚的な力が明晰さをあたえられるようになって

¹¹ BRINKMANN, p. 34 l. 19 の本文の読み τῆν の代案として異読一覧に提示された推測 τοῦ ἰ を採る。

た時に、それ [=キリスト? =^{ヌース}理知?] は入り込む、と言っているからである。もし実に — 彼らによれば — キリストが^{ヌース}理知であるのなら、かくてキリストは理知であり、かつ同時に理知でないことになる。というのも、^{ヌース}理知が入り込む以前には、もしそもそも — 彼らによれば — キリストが^{ヌース}理知であるのなら、キリストは未だ存在しないことになるからである。しかも実に、^{ヌース}理知は存在しているキリストへと入り込むのである。そこで、彼らによればかくてまたもや、キリストは^{ヌース}理知であるだろう。キリストは同時に理知であり理知でないのである [、かくてこの議論は合理的でない]。他方もし、— 彼らの中の最良の分派に従って — ^{ヌース}理知が — 彼らによれば — 存在するすべてのものであるなら (なぜなら彼らは、物質を生まれざるものと仮定し、言わば神と同時間的なものと仮定しているのだから)、^{ヌース}理知も物質もこのようにしてキリストだと彼らは仮定しているのである。もしそもそも — 彼らによれば — キリストが、万物であるところの^{ヌース}理知であるゆえに万物であるのなら、物質もまた、生まれざるものであって、それ自体存在する諸々のものの中の一つなのである。

このようにして神的な力もまた物質に^{はりつけ}磔にされたということの例として、彼らは彼 [キリスト] もまたこのような受難を耐えたと言っている — マニカイオス自身が成し遂げていることを彼 [キリスト] がなしえないかのごとくに。そのマニカイオス自身はこのことについて言葉で次のように教えている、すなわち、神的な力は物質の中へと閉じ込められており、そしてまたもや、彼らが自分たちのためにこしらえ上げる仕方では排泄されるのである、と。つまり一方で、教會的な言説に従って彼 [キリスト] が罪の解消のために自らを与えたと言うことは、ギリシア人たちの中の歴史家たちの大勢に対しても何がしかの信憑性を有しており — それら歴史家たちが、或る人々が町の救済のために自らを与えた、と語る時には —、またユダヤ人たちの歴史も、アブラハムの子を犠牲のために神に用意することによって、言説の例を有しているのである。他方で、事柄の証明のためにキリストを受難へと引きずり出すのは、存在する諸々のものの教示と知識とのために言説が足りている状況にあって、甚だしき無知のなせる業である。

25 彼らは魂のあるものを控える。つまり、一方でもし、これが別のことゆえであれば、人は〔これについて〕労苦するべきでない。他方もし、それが、神的な力は、これらのものの中により多く存在するというよりむしろ、これらのものの中に不在である、という理由によるのであれば、彼らのこの選択自体は笑止である。というのも、もし植物がより一層物質含有的であるなら、より劣ったものを食事のために使うことがどうして理にかなっているだろうか。またもし、これら〔植物〕のうちに神的な力が一層多いのであれば、魂の成長的・増大的な部分はより一層身体的なのだから、なぜこのような有用なもの〔である植物〕が食用となるのだろうか。

生成の継承に従って、神的な力がより一層物質に内住することを恐れて、〔マニ教徒たちが〕結婚と性交とを控えることについては、私は彼ら自身がどうして自分自身を受け入れているかに驚く。つまりもし、諸々の出生を通じて、つねに同じ仕方で在り同じ状況に在る諸々のものを通じて、神的な力が物質から取り去られるために、神の摂理（先知恵）が十分なものでないのであれば、マニカイオスの後知恵がこのことのために何をもたらしことができようか。実際彼はたぶん、このことのために、諸々の出生を滅ぼしかつ物質からの神的な力の離脱を迅速にするべく、自分が巨人的な気概によって神を助ける者となった、などとは本当に言っていないだろう。

巨人たちに関する諸々の詩によって語られていることは全く物語である。つまり、これらのことについてこのようなことを様々な比アレーゴリアー喩によって並べ立てる人々は、物語の形によって言説の神聖なものを隠しつつ、このようなことを語っているのである。例えば、天使たちが性交の交わりのために人間の娘たちと一緒になったということをユダヤ人たちの歴史が語る時、言説のこのような語りは、魂の成長的な力が上から地上へと〔下ってきた〕ということの意味している。詩人たちは、〔巨人たる〕これらの者たちが武装して地から立ち上り、次いで直ちに神々に対して蜂起して滅びたと語り、身体のはかなさと死性とを暗示しており、かくて詩を興趣のために驚異によって飾っている。このようなことを何も知らない者たちは、何らかの詭弁を手に入れられる時にはいつでも、あらゆる技を尽くして真実に対する敵対を完遂する

者たちのように、その僥倖を自分たちのものとするのである。

26 彼らにとって火とは、燃えはするが光のないものであり、宇宙の外のものだが、それはどこに据えられているのか。つまり、もし宇宙の上にあるのなら、宇宙が現在に至るまで無受難であることの理由は何か。というのも、もしいつか宇宙が [火に] 近づいて滅びるのであれば、今でも火は宇宙と接触しているのだから。他方もし、例えば自分自身の場に於いて中空にあり、それが分離しているのであれば、のちになっていかなる災難が宇宙に襲いかかるだろうか。或いはどうして宇宙は自らの場から移動するだろうか。どのような必然性と強力によってそうなるか。また、物質なしに火のいかなる実質を考察するか、或いは、火にとって湿気はいかにして食物なのか、或いは、より本性的な仕方ですれほど多くのことが語られるか——これらは今 [ここで] の言説には属さない。次のことは、全く以て、以上語られたことから明らかである。つまり、宇宙の外にある火とは、正確には、彼らが言うところの物質なのである。なぜならまさに、きよいものの中のきよいものとして神的な力に属するものである太陽と月は、この火の中に自分自身のいかなる部分をも残さないで、この火から分かれたからであり、物質とはそれ自体これ、すなわち、神的な力と、正確に言って、混ざらないものだったのである。宇宙の中から、自らに敵対する神の力が^{から}空になるべく、このような火がまたもや取り残されるだろう。そこで、どのようにして火は、或いは何かを滅ぼし、或いは他のものによって滅ぼされるのか。というのも、同様のものは同様のものから無受難であるということに加えて——というのも、同様のものにとって同様のものはむしろ友なのだから——私には、どうして滅亡が生じることがわからないからである。というのも、物質が神的な力から分離されて成り行く状態とは、物質が神的な力自体と混ざるより前に在ったその当の状態なのだから。したがって、もし物質が神的な力を剝奪されて滅びるのなら、なぜ物質は、神的な力が[物質と混ざる]¹²より前にも滅びなかつただろうか。

¹² VAN DER HORST & MANSFELD 訳及び VILLEY 訳の解釈に従い、*πρός αὐτήν μεμίχθαι* (BRINKMANN, p. 39 l. 9 への異読一覧に記されている推測) を補う。

[そして]別の造物活動が、物質が減びるべく、無限に至るまでこのことをも行なうのか。そしてその益は何か。というのも、[神的な力が物質と混ざること企図した] 最初の意図から生じなかったものが、どうして第二の意図から生じるのか。それとも、人間に対してすら勘ぐることがよろしくないような諸々の事柄を神に帰属させるという、その理屈はどういうものなのか。というのも、このようなことの場合に意欲することには、意欲するという語を(もし可能であっても)無造作に語ってはならないということに加えて、不可能さが帰せられるからである——彼らが本質を超えた別の神のことを語るのでもなければ。それは彼らが、^{メーヌ} 理知を有する人々のもとで推測されているのでない新奇な物質を導入するのと同様であり、そういう物質を理性は、或いは全く存在しないものとして、或いは万物の中の——まがいものという観念にすら何とかしてしか到達できないような——最後 [最悪] のものとして見いだすのである。

さて、光のない火は神的な力によって剥奪を蒙ることになる物質よりも多いものなのか、少ないものなのか。もし少ないものであるのなら、より多いものはどうして争うのか。他方もし多いものであるのなら、それは、本性が同じなのだから、自分自身を自分自身へと連れ戻すことができるだろう。それは確かに自分自身を滅ぼさない。それは、ナイル川が、ナイル川から切り離された入り江を [滅ぼさない] のと同様である。 (完)